道

m i c h i

1

2023　No. 56

世界救世教　明主様と聖地に直結する会

幸　福

古往今来、いかなる人間といえども幸福を冀(こいねが)わぬ者はあるまい。幸福こそ実に人間最初にして最後の目標であるからである。幸福を獲んがための学問であり修養であり努力であるにかかわらず、満足に摑みうる者は果たして幾人あるであろうか。大部分は幸福を獲得せんと思い続けつつかえって不幸の境遇にあり、解決の喜びを遂げらるることなくして不帰の客となるというのが一般人の現実である。しからば幸福を得るということはそんなに難しいものであろうか、私は否と言いたいのである。

そもそも幸福とは、病気貧乏闘争、この三大問題の解決が基本であることは誰も知るところであるが、言うは易く実現は難(かた)く大抵は諦めるの余儀なきに至るのである。一切は原因があって結果がある。勿論幸福とても同様であるとすればその原因をまず知ることこそ問題解決の出発点であらねばならない。

したがってその原因に不明である以上、なにほど努力しても実現の可能性はないに決っている。しからばその原因とはなにか、それを私は述べてみよう。昔から言うところの善因善果、悪因悪果とは実に千古を貫く真理である。この理を知って他人を幸福にするために努力することこそ、自分自身を幸福にする絶対的条件であらねばならない。ところが世の中には他人の不幸を顧みずして自分だけが幸福になろうとする人間があまりにも多いことである。一方不幸の種を播きつつ幸福の実を得ようとするのであるから、まったく愚かな話である。ちょうど水を押すと手前の方へ流れ、引くと先へ流れるのと同様である。

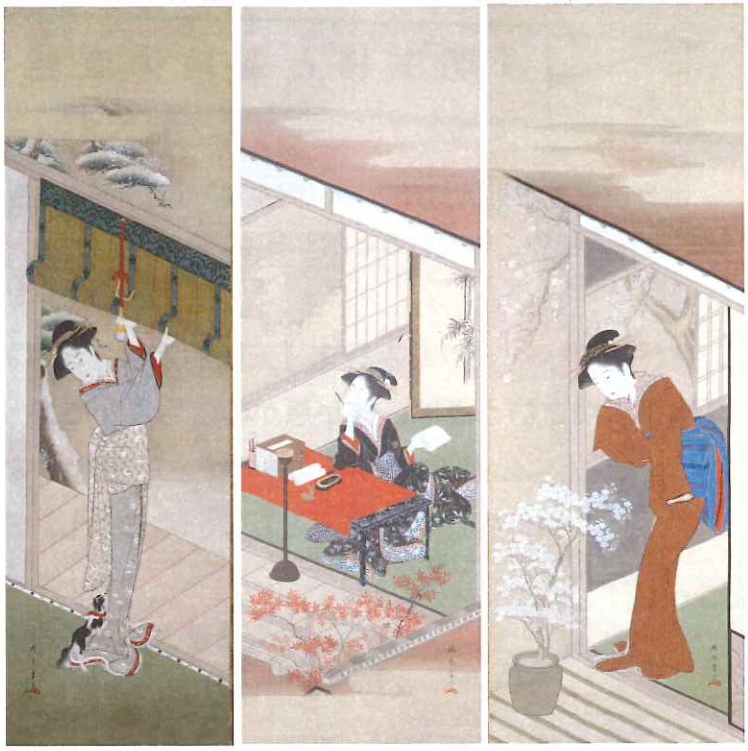
宗教が人間にとっていかに必要であるかはこの点にあるのである。すなわちキリスト教の愛といい仏教の慈悲というのも他人を幸福にする利他的観念を植えつけるのが本義である。このような簡単な道理も人間はなかなか認識し難いものである。そこで神様や仏様は種々の教義を作り、心言行の規準を示し、見えざるものの存在を教え、取次者をして誠心誠意信仰に導くのであるが、一人の人間を救うにも容易なものではないのである。それも無理はない。一般人は見えないものは信じないという教育の下に唯物思想に固っているので、なかなか耳を傾けようとはしないのであって、迷夢に鎖(とざ)され暗黒の中を彷(さまよ)い苦しみながら、結局帰らぬ旅路へ赴(おもむ)くのであるから、まことに儚(はか)ない人生というべきである。

しかるに、生あるうちに歓喜に浸り法悦の境地に住し長寿を得、真の幸福者たりうる方法がありとすれば正にこの世は天国であり、生き甲斐があるというべきである。しかしながら言うであろう。このような苦の娑婆にいてそんな幸福者たりうるはずがないと諦めている人が一般人の考えであろう。しかし吾らは断言する。右のごとき幸福者たりうる秘訣のあることで、それをご伝授する手引としてまずこの雑誌を提供するのである。

（「地上天国」創刊号　昭和23年12月1日）

勝川春章（1726～92）は江戸中期の浮世絵師で、勝川派の祖。肉筆画の技量は浮世絵師中第一級と賞される。本図は、雪月花の三幅対を平安王朝の三才媛の見立絵とし、これを当世市井の婦女風俗に描き替えている。向かって左の幅は、清少納言の「香炉峰の雪は簾をかかげてみる」という故事を、武家の奥方風の女性として描き、中央の幅は、武家の娘風の女性を、石山寺で机にもたれて筆をとる『源氏物語』の作者紫式部に見立てている。また、向かって右の幅は、「花の色はうつりにけりな　いたづらに　我が身よにふる眺めせしまに」と詠んだ小野小町を、芸者として描いている。

（ＭＯＡ美術館・箱根美術館　名作美術品カレンダーより）



雪月花図　勝川春章　江戸時代（18世紀）
重要文化財　ＭＯＡ美術館所蔵

《目　次》

基本姿勢……4
代表挨拶……5
感謝奉告①……10
感謝奉告②……14
三聖地の初日の出……16
明主様御生誕一四〇年を寿ぐ……18
新年祭（立教祭）……19
全国信徒集会……20
感謝奉告③……21
感謝奉告④……26
感謝奉告⑤……28
新連載『21世紀を生きる』（4）
「明主様と故船井幸雄氏」②……29

表紙の写真　瑞雲郷から望む初日の出

「明主様と聖地に直結する会」基本姿勢

世界救世教教祖岡田茂吉師（明主様）は、混迷する世界を導き、病貧争を根絶し、真善美の完き理想世界実現の主体であると信じます。

み教え『**天国的宗教と地獄的宗教**』において、

「本来人間という者は、善か悪かのどちらかであり、決して中間は存在しないのであるから、換言すれば、神の味方か悪魔の味方かのどちらかである」

信仰者は神の味方として、常に正しい道を歩めと、訴えられています。

み教え『**善人よ強くなれ**』において、

さらに天国建設への道筋もご提示されています。

「まず善人が団結し、連盟を作るのである。（中略）こういう案を私は提唱する。（中略）これこそ社会改善に対する最も有効手段と思うから」

と、示されています。

今こそ、混迷する世界に向けて救いの宣布のために、明主様の御心をお受けした機関が、グループが、個人が、過去のしがらみを捨て一つ心となり、力を合わせて努力することを求めます。

その姿が、地上天国建設に向けての主神の御経綸の要（かなめ）、天国人の美しい理想形“雛型”そのものであると信じます。

目　指　す　と　こ　ろ

明主様と聖地に直結する信仰とは、

〝明主様のご立教時の御心とお姿〟

にあると信じます。それは、

〝地上天国建設〟

のためです。そのために明主様がなされたことは、

〝浄霊とお導き〟

です。

私達は、行動する信仰を目指します。“浄霊とお導き”は、迷い苦しむ隣人を神の安寧の“道”にご案内する利他の行為と信じます。

そのため、“ご浄霊を取り次いでみ教えに求め、み教えに学んで行為に移す”、これを繰り返しつつ、自己の“心言行”をどのような時も美しく整えることを意識し、新人たることに努めます。

令和５年　課題

われよしの　心浄(きよ)めて　ひとよかれと
祈る心は　神に通へる

～明主様の示された「道」を求め、まっすぐ歩む～

代表挨拶

西村　正資

幾歳振り　いと爽やかな　心もて
新春迎ふ　今朝のひとゝき

（昭和二八年一月　明主様詠）

新年おめでとうございます。

一月一日、聖地瑞雲郷は、雲一つないまことに爽やかな快晴に恵まれました。

新年祭・立教記念祭開式の緞帳が上がると、まばゆいばかりの元旦の陽光が、御神殿に煌々と輝き、その神々しい霊気の中に〝明主様〟のお出ましを感じたのは私だけでしょうか。

心の内で〝今年は良い一年になる！〟と、思わず叫んでしまいました。そして、昨年にいただきました数々の御守護に感謝を申し上げ、改めて本年、明主様がお進めになる病貧争無き天国建設のご経綸に、当会全信徒が参加を許され、お役に立たせていただけますようお祈りさせていただきました。

併せて、多くのご浄化の最中にいらっしゃる皆様にも、いっときも早く安寧が訪れますよう、御祈願させていただきました。

明主様と聖地に直結される皆様におかれましては、厳しい時代の中に明主様のお導きを信じ、清々しい思いで、新たな夢や決意をもたれ、新年をお迎えになられたのではないでしょうか。

『人間は想念次第』のみ教え通り、正しい祈りと想念、そして行動を一致させていけば、必ずや、身の周りから地上天国の型が実現していくものと信じます。

「明主様と聖地に直結する会」基本姿勢について

この度当会では、会の支柱となる精神を**『基本姿勢』**（前頁）として表すことにいたしました。

その柱は、一人一人が**『善人となる』**ことです。

宗教の世界で、決して外してならないのは、神様のご存在です。その神の世界に、正神と邪神があることを、どうしても意識しなければなりません。その神界の頂点に主神が存在され、すべてを支配されているのですが、そこにさえ邪神は、徹底して抗（あらが）おうとしているのです。

明主様は『**本来人間という者は、善か悪かのどちらかであり、決して中間は存在しないのであるから、換言すれば、神の味方か、悪魔の味方かのどちらかである**』（「天国的宗教と地獄的宗教」地上天国46号）これは、非常に厳しいお言葉ですが、しかし、私達の心言行は、神律によって瞬時といえども間違いは許されない裁きの中にあるのだと教えていらっしゃるのです。『**仮に宗教が生まれなかったとしたら、悪魔の横行は、その度を知らず、世界はすでに破壊滅亡していたかも知れない**』（「超宗教」自観叢書12篇）と示され、宗教の果たさねばならない役割を説かれています。

邪神活躍の現場は、一人一人の心の内側

邪神がめざす破壊への道は、病貧争の世界を生み出すことです。その入口が、人々の心の奥底に巣食う『悪』なのだと教えられています。心身を悩まし、煩わせ、苦しめる心で、欲望を強くし、他者への怒りや憎しみ、執着をもって、自己中心的に生きようとする姿であり、仏教で言う「煩悩」（ぼんのう）ということなのでしょう。

今世界は、核戦争の危機におののき、伝染病で人々は分断され、経済で行き詰まっています。そのすべての原因が、人々の心言行にあり、そこから発せられているように思えてなりません。

邪神は今、ここ一番の大活躍であると私は感じています。

本教の混乱も、邪神にとっては、まずはじめに〝目の上の大きなコブ〟であった〝世界人類の救い主となる『明主様』〟を、葬り去ることに特化したように強く感じています。

次に、世界に〝はやり病〟を起こして恐怖をあおり、そして一国の指導者を洗脳して戦争を引き起こさせ、経済の秩序を混乱させると共に、人と人の心の絆を断ち切り、邪心の思惑通り、世界は大混乱に至っています。

善人よ強くなれ

そのような厳しい時代の到来を、明主様は、地上天国建設の重大時期に『破壊と創造』の時代が訪れるとして、警鐘を発していらっしゃいました。

群衆の中に身を潜め、嵐の過ぎ去るのを待つような自分では、必ずや後悔が待っています。

より良き社会創造のために、何かにお使いいただきたいと願う善人が団結するよう、明主様は、その教え『**善人よ強くなれ**』で、呼びかけておられます。一人では、社会を変えることは至難です。だからこそ、明主様のもとに集うことで大きな力となれるのではないでしょうか。

「明主様と聖地に直結する会」は、そういう善人が集う宗団でありたいと願っています。

『われよしの　心浄めてひとよかれと　祈る心は神に通へる』

今年は、このお歌を課題として歩ませていただきます。

私達に期待されている使命は、明主様が本教を立教された時の御心とお姿を、表わしていくことであると信じています。

それは、病貧争無き社会づくり、つまり、地上天国建設ではないでしょうか。そのために、明主様がなされたことを、今、私達が引き継ぎ体現させていただくことなのだと思います。

そして、それが〝ご浄霊とお導き〟です。

誠ある後継者として〝ご浄霊を取り次いでみ教えに求め、み教えに学んで行為に移す〟を繰返していくことなのです。

今後、機会ある毎に、皆様と共にこのことを確認しながら、歩ませていただきたいと願っております。

『道』感謝奉告より

私は、皆様の感謝奉告に出あうことを大切にさせていただいています。それは、御守護にはそこに繋がる理由（真理）があり、そこに関わった方々の努力や人間模様を学ぶことができるからです。また、その奥で働きかけて下さる、明主様からのメッセージも感じ取ることができるからなのです。

『道』先月号（55号）では、

愛知のＭＡさんは、愛車を運転し交差点を通過中信号無視した２ｔトラックが凄い勢いで車両側面にぶつかってきました。突然のことで恐怖もあり、しばらく呆然と運転席に座ったまま動けなかったとのこと。そのショックの大きさも想像されます。

掲載された写真を見ると、愛車の前部右側が大きく破損しています。しかし、運転席のドアから後方は全

くの無傷です。おそらくあと1mずれていたら、コンマ数秒早かったら、運転していたAさんが、まともに衝撃を受け、負傷し、もしかしたら生命にもかかわる事態に至っていたかもしれないと想像でき、まさに危機一髪を救われた奇蹟といっていいでしょう。

Aさんは、「なぜ交通事故に遭遇したのか？」「なぜでしょうか？」と、しっかり求めておられます。これは大切な自分の中での事後処理だと思います。

この時に大切になるのは、み教えです。

『感謝が感謝を生み、不平は不平をよぶとは正に真理だ』（「人間は想念次第」光25号）

何事も感謝の想念で整理しようと思えば、感謝の要因や学びが、いろいろと浮かびあがってきます。その一つ一つに改めて心を込めて感謝の熱量を上げ、そしてその後の生活に還元して行けば、この事故が、その後の運命向上の転機となることは、明主様が保証してくださることと思います。それが先のみ教えだと思います。時々、神様から抜き打ち審査を受けるのでしょうか。

御教えをしっかり拝読していませんと、このような事故の場合、心の自然な流れは〝不平〟へと向かってしまいがちです。まさに運命とは自分自身が運んでくるもの、と言ってもいいかもしれません。

私が知るかぎり、Aさんはここ数年、多くの方々の信仰をお支えする御用に、この車を使って東奔西走されてきています。ご奉仕の誠、仲間に尽くす思いやりがなければできないことだと思います。大難を小難に、小難を無難にと導かれた奇蹟ではなかったでしょうか。

次に、福岡のSさんは、約束の時間に遅れ気味で車を運転中、交差点で軽トラックと猛スピードでぶつかりそうになり〝ぶつかる！〟と目をつむったそうですが、次の瞬間、風が通り抜けるように、何ごともなくすれ違ったということでした。

先のAさんと同じく、Sんも、感謝で整理されています。「何もない普通の事がこんなに幸せな事かと」と報告されていますが、まったくその通りで、何もない普通の生活が、実は、霊的にはとてつもない守りの中に包まれている〝奇蹟の生活〟ということなのではないでしょうか。

最高の御守護は、何も危険がないこと。普通のように穏やかに見えることですね。そして、そのことに気づき、感謝をしっかり蓄えて、人生の質の向上を心掛けることだと思います。

不思議な流れで、先号の感謝奉告は、交通事故で重なりました。何か、明主様のご意図があるのでしょうか。

このSさんのご奉告の先月号のタイトルに「こんな

東方より陽光に乗って来る鳳凰（救世会館３階正面扉上のレリーフ）

（……）私にも」と記しましたが、この表題を記したことを心からお詫び申し上げます。

明主様が、必要あって呼び寄せられた皆様です。お一人お一人は、神様のもとに呼び寄せられ大切なご使命を持たれた神柱です。〝こんな〟とは、たとえ謙遜でもいけない表現でした。

明主様とS様を汚すことになってしまい、大変申し訳ない思いでいっぱいです。

今年、年頭の機関誌となる一月号にも、素晴らしい五本の感謝奉告が掲載されました。

大いに学ばせていただきたいと思います。また、その背後に、明主様から、私達に掛けられた新たな年への大きな期待が存在していることも強く感じさせていただいています。

謙虚に学ばせていただき、誠をもってお応えさせていただきたいと決意しています。

末筆になりましたが、今年のスタートにあたり、皆様のご健勝、そして祈りと誠が、明主様のお進めになる御神業の中に組み入れられ、大きな導きとご加護を賜りますよう、心からお祈り申し上げます。

感謝奉告 ①

明主様に導かれた信仰人生

愛媛グループ　O　Y

昨年九月、六六年連れ添った主人が、霊界に旅立ちました。今は「いつの日か私が逝く時は、手を差し伸べて迎えて下さいね。お父さん、さようなら。ありがとう」と爽やかな気持ちでおります。

この年まで幸せで来れた事、すべて明主様のお蔭です。

そのように思い、改めて明主様と自分の人生の御縁を、人生の終活として自分のためにも、残される者のためにも、しっかり整理しておきたいと考え、感謝と共に、ここに記しました。

振り返れば戦前戦後と激動の世相の中に育ち、運命は翻弄されました。勉強が好きだった私でしたが、大妻女子専門学校受験を前にして父が癌になりました。姉は、師範学校卒業を前にしていました。これからの生計をたてていくために、考えてのことだったのでしょう、父から、妹の私に「農林学校本科二年だけで学業を打切り、家と、そして母を助けてくれるように」と頼みありました。

それより生活は一変して、素足で冷たい水に入っての田仕事。大きい鍬を振り上げ、力の要る畑仕事。牛の世話。祖父の介護など、一人前以上に働く中で、母も病にたおれてしまったのです。三人の続く看病に私も体力が奪われ、衰弱し熱が続き、「肺炎」、「肺浸潤」等々の診断結果で、絶対安静を告げられました。

この時代、肺の病気といえば不治の病です。私と同じように旧・父二峰村(現・愛媛県上浮穴郡久万高原町)では、一〇人もの若い娘が寝込み、保健婦さんが注射して廻っていらっしゃいました。私も死ぬ覚悟をしていました。

その頃、いとこの西田忠義（後の義兄）が宗教に入り、ご浄霊、薬毒・肥毒を説くので、親戚中から変人扱いされていました。「お浄めだ」と言って、時々私にも手をかざしてくれましたが、〝そんなこと意味ない〟と、無視を決めていました。

そうしたある日、西田さんが置いていった「光」新聞に、何気なく目を通した時、〝あら、肺病の人が助かっておられる！私もお救いいただけるのかな？〟と、一筋の光が射したように感じ、心が動きました。

そしてご浄霊を受け始め、み教えを聞く度ごとに、明主様のお言葉がすっと頭に入り、熱など気にならな

くなり、昭和二四年入信させていただきました。「お守り」（現・「おひかり」）をいただくと、世の中が変わって〝輝いて見えた〟感動を思い出します。

母も姉も「おひかり」をいただき、燃え立つ心で、すぐに心臓が悪くて苦しむ友人の家に毎日通い始めました。大分快方に向かっていたある日、ひどい苦しみに襲われ、姉と共に一生懸命ご浄霊させていただく中で、もう息絶えたかと思った時、「そうだ、明主様に御守護お願いの電報打ってくるからね」と、とっさに出た言葉でした。私は、二km近く離れた電報局まで〝明主様、明主様〟と夢中で走り、電報を打ちました。

帰ってみれば、まさにその時間に生き返ったのだと思います。明主様の偉大なお力に、皆泣いていらっしゃいました。

こんな奇蹟もいただき、近所の人も寄って来られるようになり、有頂天になっている時、神様にだけしか解らない大浄化に遭遇し、息の根が止まりました。

この頃、この村では脳膜炎が流行り、二人が亡くなられたと耳にしました。そのうちの一人が、ご浄霊を受けていた西岡さんでした。脳膜炎にかかり医師の診断を受けぬ内に亡くなってしまったのです。すると、手の平を返したように、いっぺんに「あれは迷信邪教だ」と、村中で大騒ぎとなり、世間の誹謗中傷という弾圧に、私達家族は息をひそめ、身動きできない状態となりました。

丁度年頃を迎えた娘の私達には、周りの人、親戚の人から結婚を勧められるようになりました。姉は、ご浄霊を理解してくれていた従兄弟を養子に迎え家を継ぎましたが、私は、〝宗教を絶対してはいけない〟という条件付きでの結婚でした。

これも明主様から与えられた運命なのだと自分に言い聞かせ、一〇人家族の長田家の長男の嫁となり、無我夢中で努めました。

そして、数年が過ぎ、O家も最盛期、お舅さんの還暦祝いには、従業員さん二〇人余りを連れての京阪神旅行をしました。私は、夜船のお弁当作りに忙しく、送り出してホッと一息ついた時のことでした。外には大勢近所の子供が遊びに来ていましたが、突然「昇二君が落ちた！」という叫び声が聞こえました。何事かと驚き、走りました。すると、手すりの間から三m位下のコンクリートの溝に、逆さまに落ちている息子を発見。すぐに救出して抱き上げました。しかし、泣こうとして口は開いても声は出ず。喉に一筋赤い血の線が見えただけで、ぐったりしてしまいました。

大事な男の子で、ヨチヨチ歩きを始めたばかりの可愛いさかり。〝大切なこの子を家族が留守の間に死なせてしまったらどうしよう！〟。夢中でタクシーを呼び、病院に駆け込みました。

小児科の先生は、まぶたを開き目を見て、そして、おしめをはずして肛門を見ただけで、「内出血だから、方法ありません」とのこと。その時子供は、もう首から上が風船のように腫れていました。一瞬、私の心臓は止まりました。

途端に、今迄封じ込めていた明主様におすがりする思いが全身に広がり、待たせていたタクシーに瀕死の子供を抱えて乗り込み、救世教の先生を探し廻りました。風の便りに、「浄霊される先生が来ていらっしゃる」と聞いていたことだけが頼りでした。

やっと先生を探し当てた頃、腕の中の昇二は、だんだん冷たくなり、死んだのかと思いました。御神前に飛び込みましたが、先生は、あいにく布教所に行かれお留守でした。しかし、奥様が私を慰め励ましながら、ご浄霊をして下さいました。

必死でお祈りし、時間も忘れ、ご浄霊をいただいているうちに、不思議なことに子供の膨らんだ顔や頭に、玉のような大きな汗が、ぶつぶつ吹き出しました。変化が現れたのです。〝奇蹟だ！助けてくださるのだ！明主様ありがとうございます〟と叫び、その夜は、泣きながら息子を抱き明かしました。

「出航の寸前に知らせが届いた」と、一人引き返して来てくれた主人でしたが、抱きすくむ私と一命を取り留めた子供を見て、言葉も出ませんでした。お互いに心の内は痛いほど解り合い、涙するだけでした。

翌朝一〇時、往診していただいた時、昇二は意識を取り戻し、目を開けたのです。しかし、医師の所見は、「今日が山。これを過ぎても三日もつか、いや一週間…」と、予断を許さない状態が続きました。

立ってヨチヨチ歩きしていたのに、怪我をしてからは、転がって座ることさえできなくなり、戸の開け閉めや小さな音にも、苦痛を訴え、以前は、「ブーブー」と、あれ程はしゃいで喜んでいた主人の運転する車の音にも、気が狂ったかのように苦しみました。言葉に出せる大人だったら、「頭が割れそうだ。響く」と、叫んでいるだろうと思えました。

その出来事から、私は、なす術のなかった主人の了解を得て、ご浄霊をいただきに井手窪先生のもとへ通いました。そして、再入信させていただき、昼夜を問わず、子供にご浄霊させていただきました。

一週間近い旅行を終えて帰る両親に、神様の事をどのように伝えようかと心震える思いがしました。思い切って話をしましたが、叱責されて一言で終わりました。昇二の首から上は、紫色に腫れて、お化けのようになっていました。

その日より、今度は両親を騙す良心の呵責にさいなまれながら、毎日病院へ行くと言っては、先生のお宅の御神前でご浄霊をいただいたのでした。

それでも〝信仰は絶対反対〟の両親に、明主様のことをどうしても解っていただきたい一心の私は、思案の末悟りました。〝心から良い嫁だと信じて貰えた時、救世教も理解して貰えるのだ〟と。

その時より、今迄の自分を捨てて、両親から言われるままに素直に必死に仕えました。

やがて、明主様は、お見捨てになることなく転機を下さいました。あの頑固に反対していたお舅さんとお姑さんが、ご浄霊を受けて下さるようになり、入信も許されたのです。一緒に布教所参拝や聖地参拝までできて、O家にも御神体御奉斎させていただき、家族そろって家庭祭もできて、夢のような幸せを許されたのでした。

その後、私も、次々と大勢の方の入信お導きの御用が許されました。言語障害や意識障害が心配された息子も、浄化はありながらも無事学童期を終え、立派に成長させていただきました。我が子の子育てでありながらも、一人の人間を育て上げる御用を、明主様から与えられた尊い御用なのだと思えたものです。

波乱万丈のような生涯ですが、私の人生、いつも幸せでした。私の中にはいつも明主様が居て下さり、み教えが身に沁みていましたから、いつもいかなる時も感謝に変えることができたのです。感謝が感謝を生むこと、感謝の心は神に通じるという幸せを、魂で感じることができました。

昭和五〇年代には、お舅さんが脳梗塞で倒れ、動けぬ身体になる中、丸四年間看病を続けました。引き続きお姑さんのお世話が続き、私の身体もとうとう悲鳴を上げました。愛媛大の脳神経科でもどうにもならず、廃人のようになってしまいました。そんな時に出会ったのが、当時四国地区本部長であった則武先生でした。布教所の一室において下さり、どんなに夜遅くお帰りになられても、必ず浄霊をして下さいました。生きる気力を失っていた私には、先生が明主様のように見えました。先生のお蔭で、今の私があります。この度の教団浄化でも、則武先生がいらっしゃるならばと、安心して心落ち着けることができました。

いろいろとご浄化も乗り越えさせていただきました。父母も夫も看取ることのできました今日、息子はもう還暦を迎え、長田家を継ぐ傍ら、木材市場の社長もして社会に貢献しています。

九二歳ともならせていただきました今は、周りの人からも良くしていただき、こんなに甘えて良いものかと、明主様に問いかける程、子供達からいっぱいの愛を受け、また、孫やひ孫の可愛さを心から味わい、溺れたわむれて勿体ない日々を過ごさせていただいています。今は感謝でいっぱいです。

感謝奉告 ②

浄化は有難いものと思えるように

沼津グループ　T　M

二〇二一年六月、持病の自律神経がひどくなり、乗り物に乗れなく、直結の会事務局のご奉仕を離れました。

その頃、北林さんからトイレ掃除を勧められ、毎日自宅のトイレ掃除を始めました。掃除をしているとトイレの壁の汚れが気になり、リメイクシートを貼ることにしました。トイレが綺麗になると自宅のいろいろな所も気になり、リビング、洗面所、カーテン、食器棚と家がとても綺麗になり、家族からとても喜ばれ、皆の役に立てたという充実感が心に明るさと元気を取り戻してくれました。

リメイクシートで一新した台所

その頃、明主様の描かれた観音様の模写を始めました。ある時、頭がふらふらする中、近くの小学校にミニ花を届けに行きました。その帰り道、ふと空を見上げた時に彩雲が見え、はじめは鳳凰の形に見えましたが、次第に龍のような形となり、その上に明主様のお姿を感じました。身体が苦しくなるとつい後ろ向きなりますが、明主様はいつも目を離さず、側に居て励まして下さっているのだ。それを〝忘れてはいけない〟ありがたいことだと心から感じました。

また、毎週のように近くの東方之光といづのめ教団のセンターに、ご浄霊をいただきに行きました。皆様のご浄霊と祈りを沢山いただき、有難いことに次第に体調も回復、昨年の四月からは、妹の事業の簡単な手伝いも出来るようになりました。

しかし、一一月二七日、喘息と鼻づまり、風邪が重なり、お玉串を捧げ父からご浄霊をいただきましたが、呼吸がとても苦しくなり、一度は救急車を呼びましたが、お蔭でその後落ち着き、隊員の判断もあり病院に行かずに済みました。家族がご浄霊を取り次いでくれ

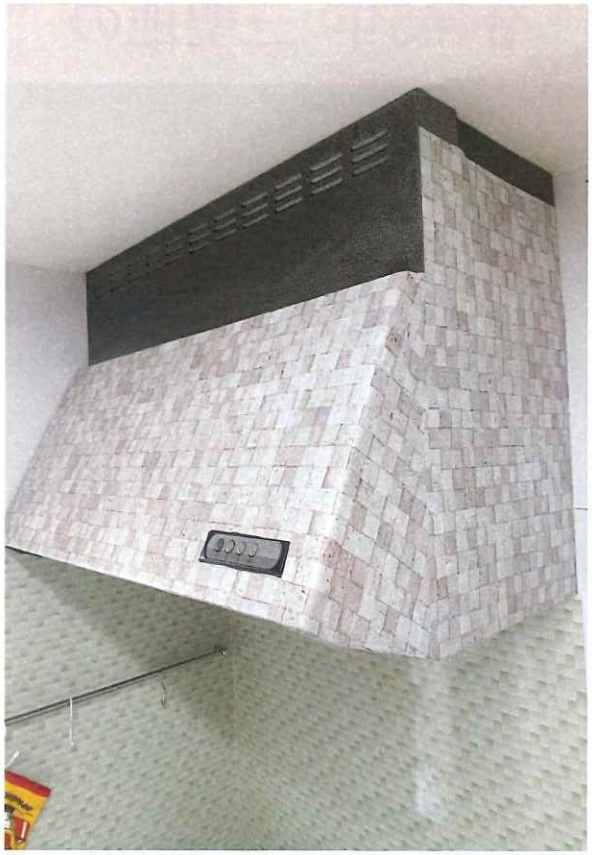
ることの有難さと共に、ご守護に感謝いたしました。

気づくと、長年の鼻詰まりも良くなり、匂いが分かるようになり、口呼吸が通常に戻っていました。

この度の体験を通して、不平不満を言う事の怖さを知り、反省いたしました。家族に支えられ、生活も出来、ご浄霊もいただけるという幸せを忘れ、浄化は有り難いことと分かっていても、つい、辛いことに心を奪われ、なかなか有難いとは思えなかったのです。浄化は、神の愛なのだと少し思えるようになりました。また、御教えにあるように〝性格が変われば病気も治るんだ〟と思えるようにもなりました。これからは、怒らない、不平不満を言わない。神様の喜ばれる言葉を沢山思い、天国的言葉を出していきたいと思います。

そのように心の向きを正そうとすることで、不思議と心が穏やかになり、前向きになれるようになりました。

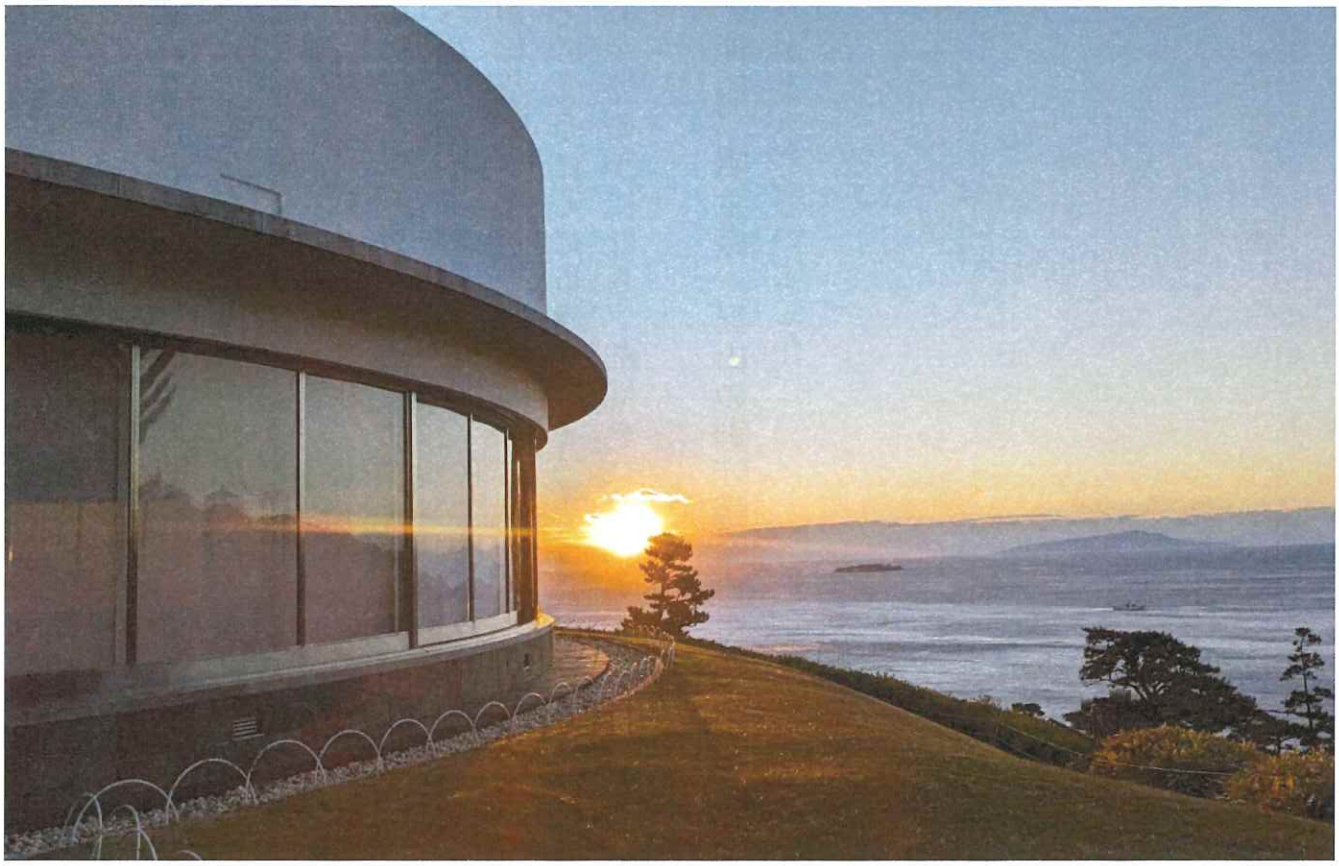
大神様、明主様、沢山の御守護をいただきまして、ありがとうございました。



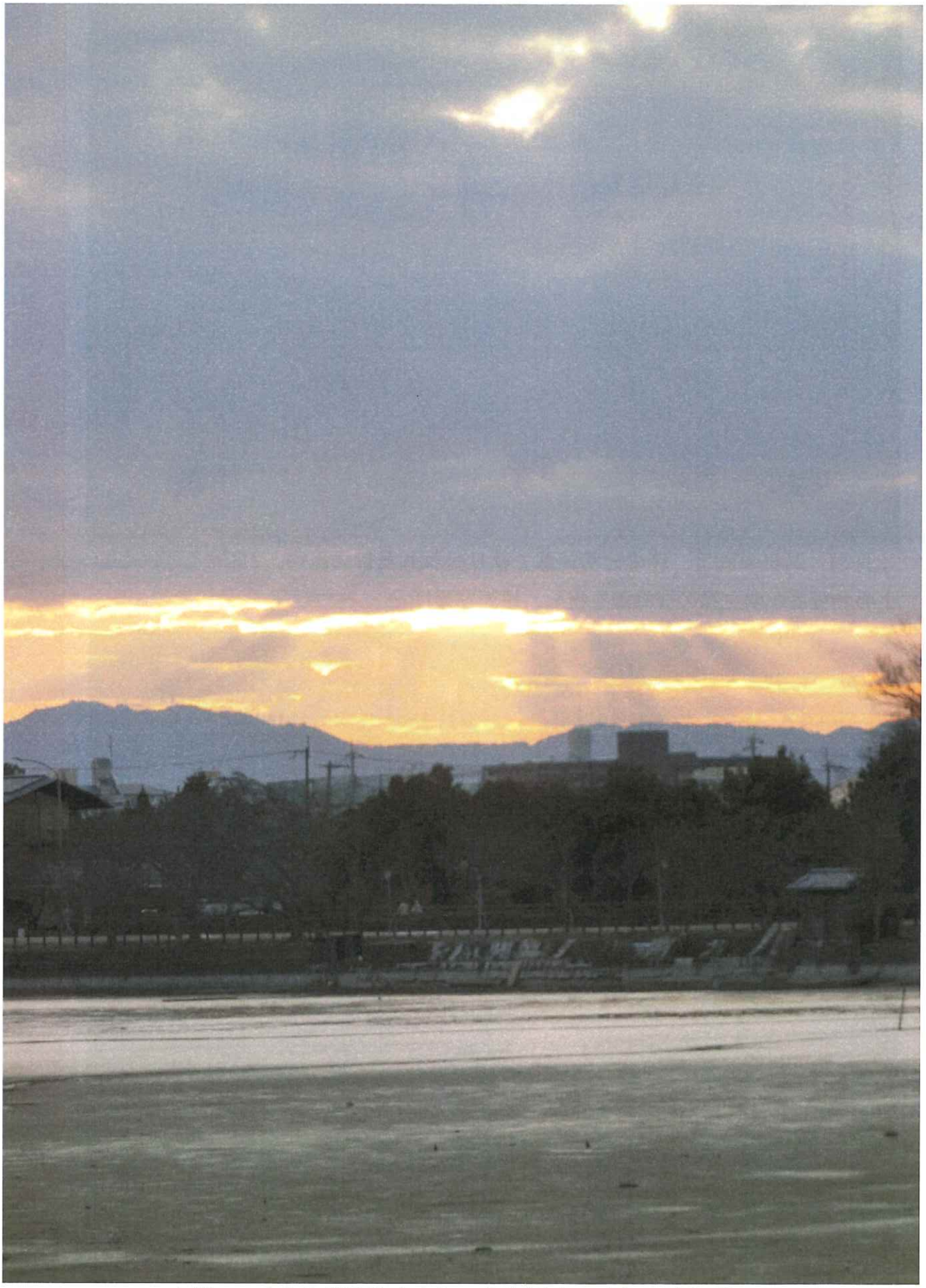
換気扇もリメイクが施された

令和5年 三聖地の〝初日の出〟

山の端を切り裂いて差し込む旭光（箱根神仙郷・観山亭）



令和5年元旦、水平線から昇る朝日を迎える（熱海瑞雲郷・水晶殿）



古都の天空から降り注ぐ金色の光束（京都平安郷・広沢池）

明主様　御生誕一四〇年を寿ぐ

12月23・24日の両日、箱根光明神殿で執り行われた御降誕祭。2日間で6000名以上の参拝者が明主様の御降誕を祝し、感謝を捧げた

熱海救世神殿において、12月22・23日、明主様の御生誕140年を寿ぐみまつりを斎行。2022年の総括と新たな年の決意を、感謝をもって奉告した

立教祭（箱根）

凛とひきしまった霊気の中、箱根光明神殿に令和5年の御神業事始めの善言讃詞がとどろく

新年祭・立教記念祭（熱海）

無風で雲ひとつない晴天に恵まれた瑞雲郷の元旦。聖地参拝でスタートした信徒の祝詞が救世会館に響く

聖地直結の会　全国信徒集会

北海道から九州に至る各地から参集された会員

感謝の年から
報恩の令和5年に

令和四年一二月二三日　救世会館での御生誕祭を終え、聖地直結の会全国信徒集会を開催。信徒が一堂に会する機会は年2回。新型コロナ感染再拡大が危まれる中ではあったが、三〇分間の集会を通して、明文化された会の基本姿勢が示されるなど、会員の交流も含め、中味の濃い会合となった。

西村代表の話に真剣に耳を傾ける会員

記念品が一人一人に

感謝奉告 ③

「脳腫瘍が消えた！」

鹿児島グループ　垣本　孝行

平成二八年二月二日次男崇志が、「身体がだるい。疲労困憊」ということで、鹿児島市内の今村総合病院にて診察を受けました。医師から「紹介状を書きますので、すぐ鹿児島大学病院に入院し、精密検査を受けて下さい」ということでした。検査の結果、「急性骨髄白血病」という病名を告げられ、奈落の底に突然突き落とされたような大きなショックを受けました。

このことは、親だけでなく、五人の息子達にとりましても言葉に表し難い、非常に厳しい浄化となりました。また、同時に〝このご浄化を通して、私自身、足元から一つ一つ見直していかなければならない時だ〟と、覚悟をもって受け止めました。

実は私は、五九歳の頃から腰痛が悪化し、歩行することも困難な状態が続くため、市内の日高外科病院で受診。結果、脊椎間狭窄症が判明しました。症状が悪化の一途をたどったため、家族で話し合い、六〇歳をもって四二年間お許しいただいた専従の道を退職させていただく道を選びました。退職後は、リハビリの日々で、信仰的な活動は何一つできていませんでした。そうした中での次男のご浄化でした。〝明主様を信じ求める心はどうか〟、また〝明主様のご日常やご生活、そのお心やお姿に倣うことに努めているかどうか〟自問自答が続きました。私は、何一つできていない自分に気づき、明主様に心からお詫びを申し上げました。

浄化を乗り越えた崇志さん（前列右端）と、正月、垣本家に晴れやかに集まったご一家。前列中央が孝行氏

息子の治療は、抗癌剤、放射線が中心でした。骨髄移植ができる状況になった時に備え、同じ血液型(白血球の型＝ＨＬＡ型)を求め、兄弟の血液検査を行い、結果、四男国之が適合することが確認できました。

その後、崇志の容態が安定期に入り、骨髄移植が実施されました。術後順調に回復、七月三〇日に退院することができました。そして、会社にも復帰が叶い、自宅を新築することまで許されました。

順風に乗ったかに思えた崇志でしたが、令和二年三月四日、三男庄輝から突然「お兄ちゃんが再発した」と連絡が入りました。翌五日、鹿児島大学病院に入院。以前にお世話になった医師が担当し、前回と同じ治療をして下さいました。

本人は前向きでしたが、家族にとっては言葉にならない不安感でいっぱいでした。すぐ聖地に連絡し、ご祈願をお願いしました。四月二六日、病院を訪ねると、医師から説明がありました。「三月八日一回目、四月一四日二回目の抗癌剤治療をしました。白血病細胞が減ってきていますが、消失はしてはいません。二八日から、三回目の抗癌剤治療を始めます。この治療は、かなり強力な治療をせざるを得ない状況です。治療中、急変する可能性もあります。非常に危険な状況で、白血病への治療継続で良くなる見込みがある場合は、全力を尽くしますが、治癒が望めない状況での延命処置は、本人が苦しむだけなので行いません。家族と過ごす時間を優先することになります」との説明でした。

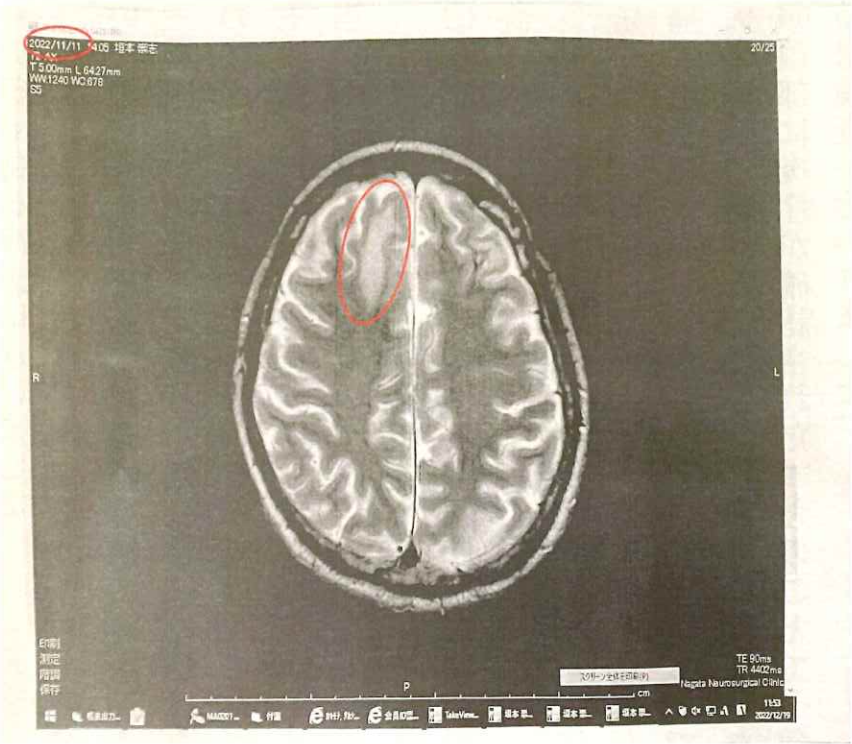
崇志にも説明があったのだと思います。〝余命数ヶ月〟と受け止めたに違いありません。「両親、兄弟との面会をさせて下さい」との願い出に対して病院は、コロナ感染対策の為、面会は本来禁止でしたが、特別に許可を出してくれました。面会に訪れると「明日から厳しい治療が始まります。どう変化するか分からない」と息子。これが最後になるかもしれないと思ったのか、私達親に対し、そして兄弟ひとりひとりに対して、今迄一緒に歩んできたことへの感謝の思いを笑顔で語り続けました。

面会は、病院に配慮し、一時間程で切り上げました。すると、主治医から「明日から一日一時間、二人まで面会していいです」と伝えられました。コロナ感染対策下ではあり得ない奇蹟でした。嫁のひとみさんと長男から「お父さん、ご浄霊の取り次ぎをお願いします」と言われました。その時家内が、ひとみさんに「崇志のおひかりを病室にお届けして。そして、ひとみさんも『おひかり』を掛けて下さい」と頼みました。

ご浄霊を取り次ぎ始めて四日目のことです。息子の魂、身体の隅々まで、お光がどんどん入っていくのを感じました。不思議な体験でした。私は〝これでいける！命を許される〟と強く感じさせていただきました。

その後も毎日浄霊に通いました。
次の血液検査の結果、癌細胞は０％。癌が消失していたのでした。そして、骨髄移植の時を迎え、今度は三男庄輝が適合し、五月一四日移植を受けました。その後の経過は、安定しない日が続きましたが、六月一五日聖地地上天国祭を境に血球が増え出しました。本当に不思議で大きな奇蹟でした。
七月二〇日無事退院を果たすことができました。三〇日には、四一歳の誕生日を家族みんなで祝うことが許されました。
徐々に体力もつき、再び出勤できるようになっていましたが、昨年三月一二日、本人から電話が有り「頭痛、吐き気、ふらつきがある」ということで、鹿児島大学病院で調べたところ、「血液に問題はないが、左頭頂部に炎症が確認された」とのことで、急遽入院、精密検査が行われました。
一五日、医師から説明があり、「白血病からくる脳腫瘍です。左前頭部に白い塊と後部にある薄い雲状の患部を取り除く必要があります。直ぐ手術しないと危険です」とのことで、手術を受けることになりました。
手術は成功。後の放射線治療について「術後レントゲン検査の結果、白血病の細胞が点々と頭に発症、頭から脊髄に沿って骨髄まで放射線治療を行います」との説明がありました。その治療も、四月一五日に終了し、経過は良好で二二日に退院しました。
そのように目まぐるしい変化の変転の中で、聖地直結の会から私に「九州のご神業を手伝って欲しい」との要請がありました。〝このような時期に、願ってもない御用のチャンスを許され、有難い〟と感謝してお受けさせていただきました。
私の頭にみ教えが湧いてきました。
『神様の役に立つ者は、どうしても助けます。大変なお力で、助けようと思えば何でもないのです。ただ助かる条件が揃わないのです』
『神様から与えられた仕事をすればよいわけです。ぶっつけられた仕事をすればよいわけであります。あんまり人間の智慧や考え出さない方がよいです』
私は、再び御用をいただけることに、心から感謝申し上げました。
一一月一五日、息子から連絡が入りました。大学病院で受診したところ、脳腫瘍の再発が確認され、二一日から入院になったとのことです。これまでの度重なる治療で体が耐えられる治療は限られているようで、昨年三月出た抗癌剤新薬で治療を行うとのことでした。直ぐ聖地にご祈願をお願いしました。代表から「御神前でしっかりご祈願させていただきます。これから御用も始まりますから、しっかりお徳を積ませていただきましょう」と、お話をいただきました。

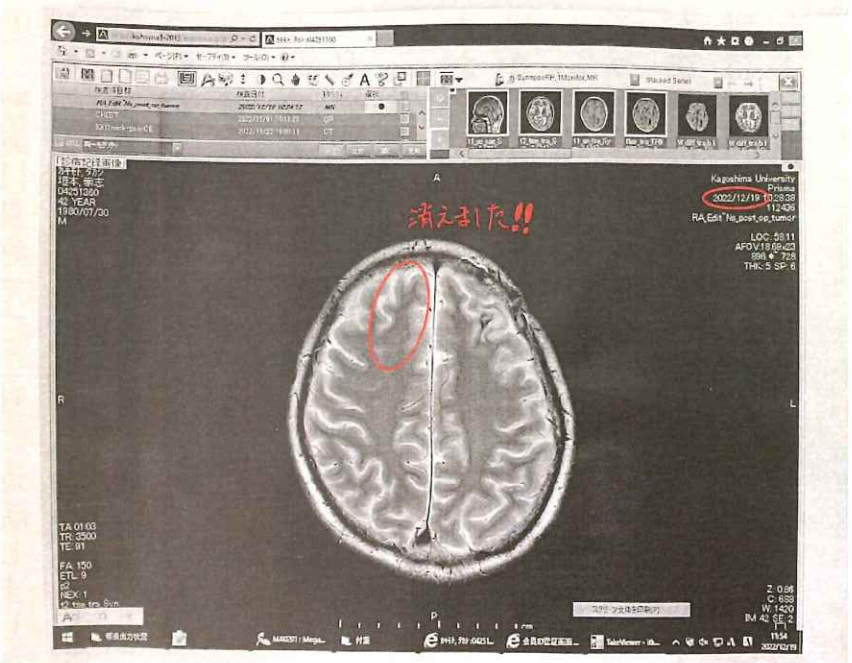
一二月一日、一二年ぶりに聖地参拝させていただき、聖地の輝きと清々しさに今更ながら感動しました。御用にお使いいただきたいとお誓い申し上げ、今日までのご報告と感謝、そして周囲の信徒のご祈願をさせていただきました。二日には、箱根光明神殿、奥津城、祖霊舎に参拝し、聖地を撮影し息子に送信しました。本人からは「ありがとう。美しい庭ですね。年月を重ねて作られた圧巻の造形、品格の漂う庭、癒されます」と、返信がありました。



2022.11.11MRIによる精密検査の結果、医師も絶句する程の深刻な状況にあることが判明。これにより余命宣告を受けることになった。

一二月一九日、息子から連絡があり「脳腫瘍の影が消えた！血液検査では血球回復期に入り、数値も安定している」ということでした。すぐに聖地に感謝の奉告をさせていただきました。皆様も御守護に驚き、共に感動し喜んで下さいました。

二六日、診断の結果、数値は安定、体調も良好とのこと、「脳腫瘍が消失したことは、医学界では大変な話題となり、世界的にも初めてとのことで、どこでどう変化したのかよく分かりません」と、医師から告げ



2022.12.19MRIによる再検査の結果、患部（赤丸部分）の脳腫瘍が消滅。世界でも類を見ない奇蹟と評され、画像には、医師の直筆で「消えました!!」と書き込まれている。

られ、崇志もビックリしています。「皆様のお祈りのお蔭です。感謝しています。よろしくお伝えください」と申しております。

私は、御守護を許される中で感じましたのは、聖地での〝ご祈願の大切さ〟、そして聖地の写真もそうでしたが、み教えに『ここに来れば霊界が光っています。聖地の土を踏めば良い、ここに来ればよい。私を、聖地を思い出す。思うことで霊線がつながり浄まる』等、新鮮に学び直しました。

そして、聖地は明主様の御肉体であること。その聖地で祈願していただけることの有難さを痛切に感得致しました。

また、崇志自身ですが、いつ何が起こっても明るく前向きであったことは、家族にとって何より救いになりました。

一、明主様、ありがとうございます。
二、明主様、どうぞお使い下さい。
三、み教えに基づいて生きていく。
この三点を大切にして精進してまいります。
本当にありがとうございました。

早や春の訪れを告げる瑞雲郷の紅梅

感謝奉告 ④

癌消え、孫が「おひかり」拝受

徳島グループ　宮脇　和枝

私は、癌闘病のご守護と聖地参拝が許されたご報告を、前号の「道」に載せていただきました。

そして、その後も、数々のご守護を賜りました。

聖地地上天国祭参拝から約一か月後、七月の末頃からのことです。座ることも歩くこともできなくなり、只々横になっている生活が始まりました。

〝早く病院へ〟とは思いましたが、どうしても家を空けることができない事情があり、八月一九日、やっと病院に行くことができました。直ちに検査をしていただいたところ、「癌から膿が出ている」とのこと。即入院、そして早々に、全身麻酔により患部から出ていた膿の除去手術を受けました。医師も、溜まっていた膿が想像以上に多量だったことに驚いていらっしゃいました。

その手術を受けた後は、回復を図る治療のため、身体の左右から直腸に向かって二本の管が繋がれ、さらに下腹部に四本の管が繋がれていました。自分では身動きの利かない状態が続きましたが、聖地でのご祈願をはじめ多くの方々からお祈りいただき、また遠隔浄霊や自己浄霊により明主様から御光をいただきながら、その状況も日に日に順調に回復の道をたどることができました。

体調の改善が進み、感謝で入院生活が続く中、さらに思いもよらぬご守護を賜りました。〝癌細胞の影が消える〟という奇蹟が許されたのです。そして、想像できないスピードで、八月末には退院が決まりました。ところが、同時に、同居している家族四人が、次々に新型コロナに感染し発症したことにより、予定していた退院が、その都度延期され、病院側の特段の配慮もあって、結果入院期間は約二ヶ月におよび、退院が実現したのは一〇月末でした。お蔭で術後の回復とリハビリを兼ねた生活は、病院スタッフの完全監視の中で、無理することもなく完璧に進めることができました。

こうした一連の推移は、ほかならぬ〝明主様のお計らいなのだ〟と受け止めています。

現在私は、八人孫を授かっています。その孫達に、「おひかり」の拝受が許され、ご浄霊の取り次ぎができるようになって欲しいという信仰継承の願いが常々

ありました。

そんな折、今春、長女家族の中に、就職することが決まった孫がいます。本人に仕事の内容を聞くと、「海洋に従事する仕事」とのこと。娘夫婦は、「心配は尽きないけれども、本人の強い思いと社会貢献を果たしたいとの情熱を受け止め応援することを決めました」ということで、この就職が決まったそうです。

どのお仕事も危険が伴わない仕事はないと思っていますが、私の知識や経験の中での第一印象は、海洋業務に従事する仕事は、かなり特殊な感じで驚きでした。そこで、まず、娘夫婦に「何かしら、お守りを持たせてやるん？」と尋ねたら、「考えていない」とのこと。そこで「明主様の『おひかり』を戴いてもらえないか」と伝えると、「僕たちは、良いと思います」と、二つ返事で「本人の気持ちに任せる」と言ってくれたのです。その時は、本当に嬉しかったです。さらに嬉しかったのは、早速孫に会った時のことです。傍らには、もう一人の孫も同席しました。そして、私が「まず、自分の思いを大切にしてね。そして、押しつけではないからね」と言って、話を進めました。すると孫が「お兄ちゃんは小光だから一緒に「おひかり」をいただこう」と言ってくれたのです。思いもよらない言葉を聞き、瞬時に嬉しい気持ちが込み上げてきました。

そして、私と亡き夫の〝明主様との出会い〟について話をさせてもらいました。「唯物的な考えだった爺ちゃん（主人）が明主様に救われ、その後、明主様にご恩返しがしたいとそれまでの仕事をやめて信仰の道に専従が許されたのよ」ということも話しました。そして「それは私にとっても大変な驚きで、爺ちゃんにとっては、明主様のお力は〝絶対的なもの〟だったのでしょう」と伝えると、孫が二人そろって「いただきたい」と、「おひかり」拝受を決心してくれました。私は、あふれる涙を止めることができませんでした。

〝明主様、ありがとうございました〟と、心の中で何度も叫ぶように申し上げました。

孫二人には「早くいただけるように進めていくね」と約束しました。霊界から働いてくれた夫に報告しながら、喜びと感謝を共有することもできました。私の身体に現れたご浄化の意味も、孫への信仰継承が叶えられていく結果を見せていただき、深いご神意も覚らせて頂けたように感じています。そして今、あらためて強く感じていますことは、〝正しい祈りは、必ず叶えてくださる〟ということです。このことを、身をもって教えていただきました。

何事においても、明主様のお導きなのだと、心から感謝を申し上げます。

感謝奉告 ⑤

浄霊会で腰痛癒え立ちあがれた！

徳島グループ　Ｍ　Ｋ

令和四年一二月一一日（日曜日）の浄霊会にいただいた御守護を感謝報告をさせていただきます。

皆さんに浄霊日を知らせ、準備をしなければと思っているときに腰が痛くなり、歩行が困難になり、ベッドに横になっていました。

息子からは「一一日の浄霊会はできるんで？」と言われ、毎日浄霊をしてくれました。

当日、御神前がある二階へ行くのに、階段を這うようにしてよじ登り、皆様をお待ちしておりました。

一〇人の信者さんが集まって下さり、ご参拝をさせていただき、相互浄霊は、私は大桑先生よりご浄霊をいただきました。

浄霊後、先生から「立ってごらん」と言われ、おそるおそる立とうとすると、先ほどまでの痛みが、うそのように消え、立つことができました。

その瞬間、皆様の大きな拍手をいただきました。私も「明主様ありがとうございます」と言いながら二、三歩歩くことができ、またまた大きな拍手をいただき、私は思わずバンザイをしました。またもや大きな拍手をいただき、皆様と一緒に明主様の素晴らしいお力を見せていただき、感動の渦が湧きました。

この後、皆で〝明主様に帰一する信仰をさせていただこう〟と誓い合うすばらしい浄霊会が許されました。これからも、自宅での浄霊会をさせていただくことを願っております。

沢山の信者さんのご祈願、浄霊、遠隔浄霊、また、息子や娘からも毎日、明主様のみ光をいただき、お蔭様で日常生活ができるようになり、楽しく過ごさせていただいております。

大神様、明主様、また、信者の皆様、ありがとうございます。私、九四才、生ある限り頑張らせていただきます。ありがとうございます。

新連載『21世紀を生きる』（4）

「明主様と故船井幸雄氏」②

高頭　和生

先月に続き、経営コンサルタントであり、90年代の精神世界・スピリチャルブームをけん引された故船井幸雄氏の著書と明主様の御教えを照らし合わせて一緒に学んでゆきたいと思います。私が船井氏をリスペクトした経緯は「明主様の御教えに沿った天国人としての生き方を、解りやすい現代語、ビジネス用語に訳してシンプルに表現されているかけがいの無い存在」と受け止めた経緯を、前号で触れさせていただきました。経営コンサルタントは一企業の経営に対して助言をし、改革、改善を推し進めて提案を促し、儲かる会社にするのが仕事です。うまくゆかない場合は、その会社も、働く従業員も未来を失うことになります。評価は結果がすべてで、その結果が信用されなければコンサルタントとして次はありません。当然そのためには、騙したり嘘をついたりと、反人道的なこともしなければならないこともあると普通は考えるでしょう。当初船井氏も負け知らずの手腕で企業を発展させたと言われていました。ところが店舗の出店や移転、新規事業の決断などの経営判断にあたり、彼のアドバイスを聞かない経営者がいることに気付きます。なぜかと問うと「信じている神さまが…」とか「占いで見てもらったら…」など、目に見えない何かを信じて経営判断をされている人が多くいることに気付かれました。「自分の敵は目に見えない世界…」と、そこから神霊、精神世界の勉強を猛烈な勢いでされたようです。その結果、「天地自然の法則」を会社経営に反映させ、業績を上げるようになりました。経営コンサルタント企業としては世界で初めて株式一部上場をし、世界中から仕事の依頼が来るようになりました。船井氏の著書は経営者だけではなく、普通の生活をする私たちにも「上手に生きるためのルールとコツ」という切り口で分かりやすく説明してくれます。それには「人間としてのあり方」や「この世の中の仕組み」を前提としていますので、とても興味深い内容で、信仰行為主義をうたう明主様の御教えと重なることが多くあります。

天地自然の理（ことわり）

この世の中は、一つの偉大な意思（サムシング・グレート）によって創造され、運営され、管理されている。

多くの著書を熟読し宗教を研究され「この世の中の仕組み」を、とてもシンプルな一言にまとめられた言

葉だと思います。そして「サムシング・グレートは、宇宙を創るとともに、その分身を宇宙内の全ての個々に、『魂』として配置したようです。」と、私たち人間含め、全ての存在に「魂」があるということを前提としています。これを企業経営者に伝えていると思うと不思議な感じです。私は、サムシング・グレートは創造主であり、明主様の言われる「主神」、「大自然」と捉えました。そして世界中の人が幸せになるための運営と管理を任されて行っているのが、自らを現場監督と申される明主様なのではないでしょうか。

船井氏は、「サムシング・グレートの思いにもとづく絶対不動の理法があり、それを天地自然の理と呼んでいる」。そして、「天地自然の理にしたがえば、『ツキ』がめぐってくる。ツキを呼び込むことは、すなわち天地自然の理にしたがうこと。」といいます。私は明主様の御教えが重なりました。

そもそも大乗とは大自然という意味である。大自然とは、万有一切の生成化育のあり方をいうことは勿論である。故に大乗とは一切を包含してあますところがない。～中略～　右のごとく、一切万有の活動を凝視するとき、そのところに自然の道が窺われる。勿論道に従うことによって順調に進むべきことの認識を得る人にして、真の人たるの価値があるのである。この理によって、道に外れるときは無理を生ずるから、必ず支障を及ぼし、結局停滞または破壊されることになるのである。右のごとく道に叶えば創造となり、道に外れれば破壊となるというのが、この世界の実相である。ちょうど汽車、電車が軌道に外れなければ進行し、外れれば駄目と同様である。故に一切は滅ぶるのも、滅ぶ理由があり、生まれるのも、生まれるべき理由があり、決して偶然はない。すべては必然である。

（「自観叢書」12篇　昭和25年1月30日）

船井氏の言葉を要約すると、「この宇宙は日々生成発展しており、地球もこの世の中も時と共に良くなるように出来ている。その速度は徐々に進んでスピードアップしている。私たちは幸せになるためには、運やツキを向上させ人生が豊かになることで、それには天地自然の理に沿った生き方をすること。」とされ、その理を解りやすくあげてくれます。例えば、「長所伸展法」。良いところや得意なことを伸ばして行くと、短所は自然に消えて行く。他人の良いところを見つけて、認めて、とことん伸ばしてゆくことが、天地自然の理にかなった成長法則だと言います。また「包み込みの法則」は、全てを肯定し、包み込めるようになることが、人としての努力目標であり、自分と異なる意

見を持つ人や意に沿わない人を否定するのではなく、良いところも、悪いところも、まるごと包み込む大きな器量を持った人が天地自然の理に合っていると言います。ぜひ目指したいと思います。さらに「鏡の法則」、「愛情の法則」と二大処世原則があり、相手に向けた気持ちや行為はそっくりそのまま相手から自分に返ってくること、そして人でもお金でも情報でも、愛情をもって大切にしてくれる人のもとへ集まってくる。ということも言います。人に好かれるためには「人を好きになる」こと。そして人を助ければ、人から助けられるのだということも天地自然の法則です。船井氏の法則はまだまだたくさんありますが、どれもシンプルでとても分かりやすく書かれています。ぜひご一読されることをおすすめいたします。

今年も一年はじまりました。ご一緒に天地自然の理にそったツキを呼ぶ一年にしてゆきたいと思います。

つづく

参考書籍　「マクロに発想する法則」
著者　船井幸雄　株式会社サンマーク出版

この連載は〝明主様を求める〟ひとつの切り口として紹介しています。会としてみ教え解釈の固定化を図る意図はありません。寛容にお読みいただければ幸いです。（編集者）

世界救世教　明主様と聖地に直結する会
（聖地直結の会）
〒413-0006
熱海市桃山町26-1　救世会館１階
電話　0557　85　8060
FAX　0557　85　8185
seichicyokketsunokai@outlook.jp

No. 56 2023年1月15日発行

飛　躍